

現代社会における仏教の役割

中 里 悠 光

既成仏教が現在直面している最大かつ重要な問題は、仏教をいかにして複雑化した人間疎外の現代社会に生かすかにある。戦後経済復興の名の下に個人の尊厳が軽んぜられ、よそ見をする間もなく国をあげて疾走した結果六〇年代に入りようやく国民生活に安定の兆が見えはじめた頃、あちらこちらにぼろが現われた。物質偏重の社会体制は欧米からエコノミックアニマルと呼ばれるまでに至り、人々は物がすべてではないということを中心に感じながら尚且つ自分を静かに見つめる余裕すらない状態にある。そのような時大衆に精神的充足を与え、心の空白を埋めるべく宗教の必要性が叫ばれてはいるものの現代の既成仏教にはそれに応えるだけの力はなく、一般大衆と共に右往左往しとても大衆を救うどころの状態ではない。形の上では出家と呼ばれ、出世間と称しながら実は世間に深く埋没してしまい、かつて社会の中心的存在として民衆の先頭に立ってこれを率いたあのエネルギーは見ると影もない。「妙と蘇生の義なり」との遺訓がどのように生かされるか、既成仏教がどのような形でいつ蘇生できるのか、その可能性は現在のところ皆無と言っても過言ではない。

抑々人間が自分の住む地域社会の理想を宗教の世界に求め、人間のあるべき姿、人生のあり方を宗教に求めたところから人間と宗教の関わり合いが始った。しかしながらそれはあくまでも閉鎖的な地域社会の枠をでることのない限ら

れた社会において可能なのである。人間の生活空間が拡大し、また帰属する集団が複数化してくるとそれまでの価値観にては推し測ることのできない様々な事態が生じ、更には西欧思想が好むと好まざるに拘わらず日常生活の中に入りこんでくる、その結果従来とは全く異なる思索方法が紹介されることとなり、人々はそれに困惑し、充分理解し自分のもののできないままそれまでの価値観・思索方法を駆逐してしまった。社会は大衆の思惑とは別な方向に全くかけ離れた速度で進展し、一般大衆はただただ手を拱いてこれを見守るばかりであった。このことは仏教界においても決して例外ではなく、今次大戦の敗北により寺の所有地は解放され、檀家制度は解体され、数百年の間大衆の上に臥坐をかいていた既成仏教教団は根底から覆され、その存在すら否定されかねない状態に置かれてしまった。そして気が付いた時には既成仏教は葬式とそれに伴う仏事及び祈禱の担い手としてしか現代社会に生きる道を捜し得なかつたといつても過言ではない。勿論観光客から拝観料をとって寺の維持経営に当てているような参拝業なみの観光寺院などは既に仏教とは名のみの脱殻に過ぎない。

所謂葬式仏教と呼ばれるものは決して大衆が仏教を信仰しているから葬儀を仏式で行うというわけではない。社会現象として葬儀を捉えてみるとそれが信仰と結びついている場合は極めて稀である。現代人にとっては死者の葬いが無事にできるならば宗教の如何は問わない。たまたま死者が仏教徒であつたから、盆・彼岸にお経に来てくれる、お墓参りをする寺が仏教教団に属しているからといったごく単純な理由によつて葬儀の形式が決まる。信仰と葬式が結びついている例は全くと言ってよい程見当らない。それが証拠には最近の都市社会にあつては僧侶ぬきの組合葬、葬儀屋による形だけの葬儀が増えているという。いよいよ死者の魂を葬うべき葬儀にまで資本主義の手がまわり、冠婚葬祭専門の生活互助会と称する新手の商売まで現われ、積立金制度で葬儀の費用を支払うことを口実に実際には事前

に葬儀の契約を取りかわすといった西歐的な割賦販売方式による葬儀の先取り現象まで出現している。これは一度経験してみると解かるように総額においては決して費用は安くあがるものではなく、かえって葬儀を盛大にするようなシステムになっているのである。更に嘆くべきはこの機を逃さじと互助会と契約を結び、葬儀にありつくような葬式屋とも言うべき僧侶の出現を見ることである。葬儀の意義が死者の冥福を祈ることにあるとするならば通夜から埋葬まで時間刻みに行われる葬儀屋による葬儀の執行は死者を物としか見ぬ経済偏重の社会にあってはもはや死んですら安らぎを得ることができない誠に憂うべき現象である。

既成仏教者はこのような現状をよく把握してもう一度原点にたちかえり葬儀の本質的な意味を考え直し、自ら姿勢を正して行かなければもはや取り返しつかない事態に至ることは目に見えている。

もともと仏教の本来的立場からすれば生きていくの身で仏となるべき教えを説く仏教が死者の為に葬儀を執行し引導を渡している限り、この末法の世に仏教を广泛宣传することは不可能であろう。葬儀は決して死者の為だけのものではなく肉親の死を通して改めて生きることの尊さを覚し、人生のいかなるかを示すことこそ我々仏教者に与えられた義務なのである。葬儀は一般大衆に仏教の何たるかを語るまたとない好機なのである。この機会を自ら潰してしまつてただ読経、回向のみに終り、それで事足れりとするならばただ単なる「葬式坊主」の誇りをまぬがれることにはできない。死者となることよつて成仏できるといった誤つた大衆の概念を正さなければならぬのに、ただ世俗的慣習に流されて葬儀を執行していたのでは「生きていくこの身が成仏しなくてはならない」との仏の教えは一般大衆に伝わらないのである。確かに死者の冥福を祈り、死者を称えることも葬儀に際して必要なことではあるが、それだけでないことを改めて自覚しなければならぬ。「きよう他人の運命としておとすれた死が、明日は自己のそれとなり

かねない彼らに死の覚悟を迫り、生の厳肅な意義にめざめさす。それが葬儀の眞の仏教的な在り方である」とは戸頭博士の言であるが、仏教者は正にこのことをしつかりと自覚して葬儀に臨まなければならない。

葬式仏教は古来よりの世俗的習慣である死者の埋葬と自然にかかわり合いをもち、江戸幕府の宗教政策のひとつである檀家制度の上に安穩としているうちに知らず知らず葬式請負業になり下りかねない地位に置かれてしまった。葬式に関することは一向にさしつかえないが、ともすれば葬式請負業的な安易な考え方に墮することのないよう心しなければならぬ。また葬儀に関連した仏事として法事も既に既成仏教における寺門経営の重要な柱となっているが、これについても同様に普段なかなか仏教的環境に接することのない大衆に対しやはり死者の遺徳を偲ぶと同時に仏の教えを説く恰好の場として利用しなければならない。そのほか古来より仏教の行事として春秋の彼岸並に盂蘭盆が行われているが、昭和五十四年七月二十八日、二十九日に実施された読売新聞の全国世論調査によると、宗教を信じていないと答えた人でもその中の六十六パーセントが墓参りをすると答えている。ただここで注意しなくてはならないのは前にも述べたように墓参りという行為が信仰より出ているものではないということである。つまりこのことは仏教とは関係なく祖先崇拜という世俗的習慣によって墓参りが行われているのであって決して仏教が盛んに行われていることにはならないのである。ということは仏教の本来の意味における盂蘭盆、彼岸といった概念の完全な理解ではなく、むしろ世俗的習慣に基いた行為としての意味合いが強いのであって決して楽観すべき現象ではない。戸頭博士によれば「長年の慣習の中に深く埋没してしまった彼岸会の行事は、寺院と檀家の形式的な媒介の役割こそ果していても、僧侶が、この行事から宗教的反省をくみあげることが全くなく、ただ参詣人のさい銭や供養を期待する以外の意識をもたない。檀信徒から見れば、彼岸会は日頃忘れていた祖先や、菩提寺のことを思い出させるだけのことであ

る。そして彼岸会が過ぎ去ってしまえば、このかりそめの思い出もまた遠い忘却の薄霧のなかへ消え去ってゆく。こうしたことを年々歳々くりかえしているあいだに、仏教は社会的な習俗の中で硬直化してしまつたのである。仏教者は彼岸と先祖供養とはおよそ関係のないものであることの自覚の上に立つて彼岸の眞の意味を理解させ、迷いの多い此岸から迷いのない彼岸に到ることこそ人生の究極の目的であり、聖道門における自力による到彼岸を目指す努力そのものが人生であることを理解させなければ、それこそ彼岸会までも死者の行事となつてしまふ恐れがある。

扱かてらうじ現代既成仏教の存在を可能ならしめているもうひとつの柱として祈禱仏教をあげることが出来る。葬式仏教を死者の爲の儀式であるとするならば、これは生者の爲の儀式であるという点においては確かに仏教の意に適合しているように見えるけれども果してそう考えてよいものだろうか。毎年話題になる新年の初詣などは祈禱仏教の最たるものであろう。あの光景を見る限りにおいては日本人の宗教心の深さを疑う者はないであらう。しかし一歩深く中に足を踏み入れた時、大衆が信仰から初詣でをしているものでないことがわかる。それは全国各地で行われる祭りの光景と較べた時、それが余りにも似かよっているのに驚く。情報化社会にあつては多数参加の行事に参加しないではいられない大衆の心理が働き、それがマスメディアによって煽動された結果異常なまでの参詣者数となつて現われている。その行為が自らの心の底から湧きあがる止むに止まれぬ気持からでたものでないことは彼らが宗教のいかなるかを問はずそこが神社であらうと仏閣であらうと神仏と名がつけば出かけて行くことを見てもわかる。大衆にとつては参詣の対象が何であつてもかまわないのである。ただ多数の人と同じ行動様式をもつということが大事なもので、そこに切羽詰まつた祈りが存在するわけではない。これをもつて宗教の隆盛を推し測ることなど全く無意味である。我が国の永い間の習慣としての行事であつて眞の意味の宗教心とは全く関わりのないものと考えなければなら

い。このことはこれを迎える側の宗教者自身にも責任があることに注目する必要がある。神社仏閣が一般大衆の現世的な欲望に迎合し、むしろ眼前の利益を超越することをこそ教えるべきをかえってそれを助長するが如き傾向にあることは全くもって自らの使命を忘れ自らを軽んずる行為にはかならない。宗教の本来的意義を逸脱した完全に商業ベースに乗った行為など宗教と呼ぶに足らない。まさに宗教をかくれみのとした商売なのである。

また祈禱においても同様なことが言える。眞の仏教者たる者の中に祈禱を以って現世利益の叶うことを確信してこれを行う者があるか。もしあるとしたら全くもって精神的異常者と言うより外はない。祈禱によって病気が治り、商売が成功し、その他もろもろの願望が叶うならばこの世に医師もいらぬし、わざわざ汗して努力する必要はない。

この世に生を受けた以上誰しも生老病死の苦から免れることはできない。人生において余計な苦勞を勞せず、楽々と生きて行きたいと願うのは人間本来の姿で、そこに現世利益を求める人間の弱さが存在する。このような人間の弱さを巧みに利用して宗教とは名ばかりのまやかしの新興宗教が次々と生まれ、人々を偽り、救うどころかますます迷わしているのが現代社会である。祈禱による心理的効力というものをあながち否定することはできないが、為すべき努力を果さずして自らの願望が叶うことなどあり得ないことは祈禱仏教の担い手である仏教者自身の最もよく知るところである。にもかかわらず祈禱仏教の増々盛んなる有様は社会機構の複雑化、人口の増加によって従来可能であったことが次第に実現されにくくなり、自らの力ではどうにもならないことがあまりにも多く存在しすぎる。人々は複雑化した社会の中で右往左往し、果ては希望も夢も諦め、ただその日その日を無為に過ごす。生活における物質的欲求を満たすためにのみ働き、暇があればテレビの前にくぎづけとなり、これぞ精神休養の最も手じかな手段とばかり考えている有様である。このような小市民的な人生において実現不可能な願望を叶える最も手っとり早い手段は所謂昔

より「苦しい時の神だのみ」の言葉の語るとり神仏にすがることにある。たとえそれが神であらうが仏であらうが己の願いさえ叶えてくれるならば何でもよいというのが我が国の民族性であるように思われる。それ故もし自己の願望が叶わなかった場合には平気でその神なり仏なりを否定し、別の神仏にすがろうとする。もともと命をかけて信仰する程の神仏ではないのだから捨てる時も簡単である。といって自分の願いが叶ったからと、その神仏に信を入れることもしない。事が成就すればしばらくは忘れてしまい、また新たな願い事が生ずるまでは神仏とは関り合いを持たないのが現実である。それ故願いが叶えられなかったからといって神仏を相手に訴訟を起すようなことは余程のことがない限りしない。つまり自分の願いが叶えられなければその神仏を軽んじ、時には自分には運がなかったのだと諦める。これが我が国に永い間かかって培われた民族性なのかもしれない。事成就にあたって自己の爲した努力の足りなさを嘆くこともしない、誠に以て不可解な民族というよりはかない。そこにまた祈禱仏教の盛える要素が存在するのかもしれない。

私自身決して祈禱仏教を否定するものではない。ただその手段方法が問題であると思う。祈禱によって眼前の現世的利益が叶えられるものでないことを彼らに教えることが仏教者にとるべき真の姿であらう。仏の教えが世俗的欲求を充足するなど考えるならばそれは余りにも低俗に過ぎる。確かに人間生きている以上何らかの欲求をもつことを禁ずることはできない。むしろ欲望のない無気力な人生こそ危険である。目的をもった意欲的な人生、それも世俗的欲求を超越した成仏を目指す不断の努力こそ意義のあることを教え、自分ひとりの小さな願いよりも他人の為、個人の願いよりも多くの人の願い、ひいては全人類の願いを祈ることにこそ祈禱仏教の真の姿があるのである。このことを仏教者自身が自覚し彼らに理解させることこそ我々仏教者に与えられた使命である。

現代社会において仏教の果すべき役割は決して葬式仏教や祈禱仏教でないことはこれまでのところで述べたとうりである。

では仏教者、殊に既成仏教教団に属する我々僧侶はこの混迷する現代社会で何をしていたらよいのであろうか。この問題は恐らく仏教が存在を始めてよりこのかた常に遭遇し、将来も存在し続ける問題であらう。そしてこのことこそ我々が常に心に抱き続けなければならぬ問題なのである。問題意識の存在、危機意識の認識こそ仏教者に要求されるべき態度である。仏教者自らがこの問題から目をそむけ、世俗的社会の中に埋没してしまふなら、大衆の救済を旨とする仏の慈悲が大衆の要求に応えられないような危機に瀕し、終いにはその存在自体が危ぶまれる結果を招くとは必至である。

恐らく既成仏教者の中にはいまの寺院仏教から葬儀と祈禱をとってしまつたら果して何が残るだろうと不安にかられる者が少なくないであらう。それ程に現在では寺院経営の中での葬儀と祈禱の占める位置は大きくなってしまつてゐる。特に寺院の役割が葬儀と祈禱にのみ頼つてゐる現代社会の真ただ中に生まれ、この現実を当然のこととして何の疑いもなく育つた我々既成仏教僧侶にとつてこれを否定することは先ず不可能に近い。だからとつて誰もが現在のような葬儀、祈禱に頼つてゐたのでは早晩既成仏教の存在そのものが破綻をきたすような事態を招くことはまぬがれないであらう。現に既成仏教教団の矛盾、低迷の間をぬつて新興宗教と呼ばれる在家仏教教団が抬頭し、いまや既成仏教教団を凌ぐ勢力を示し始めている。これは既成仏教教団の存在そのものに対する警鐘であり、檀家制度の上に乗せて江戸時代以来の残存制度にいつまでも寄生している既成仏教が、複雑、多様化する現代社会機構に対する施策をもたず、高度経済成長の波に乗つて飛躍的に発展した経済優先の社会、政治における様々な矛盾、誤りを指

摘し得ないところにある。例えば総選挙の際には保守勢力に利用されながら信教の自由と真向から対立する靖国法案等の政府の施策に対し強力な力を發揮できないような組織としての脆さ、その他着々と進む政治腐敗、大衆無視の様な政策に対しても何ら対処することのできない体制上の欠陥は大衆社会の要請にはとても応えることのできない状態にある。そのように頼りにならない既成仏教教団をあてにしているはとても救われることができないと判断した在家仏教者の中からこれらの問題を自らの手で解決せんとして在家仏教教団が興って来たのも、もとはといえば既成仏教教団にその責任があると言わなければならない。時代の要請をいち早く察知してそれに対処すべき救済手段を構じたならば現在のようにならば既成仏教教団が無能よばわりされるようなこともなかったであろう。それではなに故にこのように既成仏教教団が弱体化してしまったのであろうか。日蓮聖人がかつて時代の要請に立て立ちあがったように大衆のための仏教を弘めるべき仏教者は二度と再び現れないのだろうか。

既成仏教教団の弱体化は既に江戸時代において幕府の宗教取締り政策として檀家制度がとられ、強制的に民衆が寺檀となるのが義務づけられた時にその萌芽を見ることができるといえる。それが明治の廃仏毀釈によって徹底的に排斥され、戦時下に於て一時勢いを得たものの今次大戦の敗北によって実施された農地解放が寺領のすべてを寺院から奪い、その為寺院経済は根底から崩れることになった。寺領からあがる年貢によって立っていた寺院は自らの手で生活の糧を得ることを余儀なくされてしまった。「貧すれば鈍する」の言葉が示すように口に高尚な教えを唱えて見ても現に三度の食事にも事欠くような状態に立たされたならば仏の教えを伝えるどころではないのが凡夫の悲しさである。このようにどん底に落ちた既成仏教僧侶が葬式、法事に明け暮れる有様をあなたがち非難することはできない。しかし戦後もはや三十年が過ぎ、生活に追われる状態は一応脱したにも拘わらず相も変わらず葬式と法事に明け暮れ、果

ては墓地の管理のような事までするに至っては仏教者としての自覚を失ってしまった現代における無用の長物とまで評されても仕方ないように思われる。現代のように混乱する時代にこそ眞の仏教者が必要とされるのである。たとえどのような要求であろうと仏の教えにそむいてまで大衆におもねるような言動は敵に慎むべきである。

もうひとつ既成仏教団が今次大戦において犯した誤ちは、仏の教えをねじまげて大戦に協力したことである。個人的には戦争反対者もあつたであろうが、大勢は人間同士の殺戮に加担してしまつた。戦争未経験者にはとうてい理解できないことではあるが、といつて外国侵略を正当化するような行爲を認めるわけにはいかない。その上既成仏教団は戦争に参加しながら戦後何らの責任をとつていないという二重の誤ちを犯している。戦歿者慰霊法要も大事なことに違いないが、それよりも先ずどのようにして戦争加担の責任をとるか未解決の、しかも不可避の問題ではないだろうか。この問題をうやむやにしていくら衆生済度を叫んでみてもその言葉に眞実の重みは感じられようはずはないのである。既成仏教団においては未だ戦後は終つていないのである。

最後にこの稿における結論めいたものを少しく述べてみたいと思ふ。我々仏教者が現代社会においてとるべき重要な態度は社会問題に対し深い関心を示し、適確に把握して事の是非を論ずることにある。寺院僧侶は世事に疎いなどといったことは決して自慢すべきことではない。むしろ恥ずべきことであつて、俗事を超越することは何も俗事に無関心でよいということにはならないのである。仏の法は世法に勝れるとの認識に立つて積極的に意見を述べ、目の前のわずかな利益に惑わされがちな大衆に警告を与えるのが我々仏教者の任務である。涅槃經に言う「結使を断ぜず使海に住せず」とは俗世間にあつて俗世間に溺れることのない菩薩のあるべき姿を語るものである。現代社会にあつてはとかく「長いものは巻かれる」といった権力追従型の人間が増え、直接自分に利害が及ばなければ多少の悪事に

も目をつぶってしまう傾向の人間が増えていく。また西欧における民主主義の眞の理解が為されていない為に多数決の原理を振りまわし、何もかも多数の力で押し切ってしまうような誤った民主主義がまかり通っている。多数が必ずしも正義ではなく、むしろ少数の中に正義のあることが多く、たとえ少数者の立場にあつたとしても信ずる所を憶せず述べる態度をもつたならば必ずや多くの者を導くことができるのである。それには既成仏教教団の構成員たる僧侶ひとりひとりの質の向上が目指されなければ他を指導することは不可能に近い。ひとりひとりが仏の教えの研鑽に努め内的向上を計らなければならぬ。教団内部において通用しても一般社会で通用しないようなことではどうにもならない。自己に徹しく他に暖やかにして初めて他も納得する。地位・名譽・金錢に対する執着を離れたものが出家であるはずが、実際に世俗社会と変りない、むしろそれを上まわるような様相を呈するに至っては大衆を指導することなどほど遠いことである。この「執着の心」を捨てること、これこそが「言うは易く行ふは難し」の言葉の示す通り誠にやさしいようである。実行不可能な、出家に対する恐らくは永遠の課題となるであろう。

次に葬式仏教、祈禱仏教をいかに乗り越えるかが問題になる。これについてはこれまで述べてきた所では結論は出ていると思うがもう一度触れてみたい。葬儀・祈禱をあくまでも布教の手段とすることが望まれる。葬儀は肉親の死を契機として、祈禱は生きる人間の願いを通して、あくまでも仏の教えの入口にほかならないということを自覚させなくてはならない。肉親の死をとらうしていかに生きることが眞の価値ある人生かということを教え、菩薩道の実践こそ我々この世に生きる者の日常の義務なのだということを感じさせる。それには葬儀の執行者たる僧侶が進んで葬儀の機会を利用してこのことを説くようにしなければならない。従来通りの法要の式次第をいつまでも踏襲する必要はなく、なるべく解り易い遺族・参列者の胸にうったえるような言葉によって引導文を諷誦するのほひとつの方法である

し、式前・式後に簡単な説教をするのも方法である。十年一日の如く形どりのことをしていたのでは移り変りの激しい世の中に対処することはできない。とにもかくにも葬儀という絶好の機会を捉えてひとりでも多くの者を仏の教えに導いていく努力をしていかなければならない。

祈禱に關しても同じことが言えると思う。祈禱をとうして人間の眼前の欲望がいかに空しいものであるか、自己の願ひよりも他人の願ひを、ひとりの願ひよりももっとも多くの人々の願ひを祈ることが眞の菩薩の行すべき道であることを教えることが祈禱の生かし方であろう。

とにかく現在においては布教の手段たるべき葬儀なり祈禱なりが目的化している感がある。これらはあくまでも手段にすぎないことを僧侶自身が自覚してこれを善用していかななくてはならない。

何はともあれ布教の根本道場たる寺院にいかん人々を集めるかが現代既成仏教僧侶の悩みの種であると思う。ひところは年寄の集るところが寺院であつて、若者が集らないでこまると嘆いていたが、最近では医療の進歩、娯楽機関の増大によってその年寄すらかなかなか集まらないのが現状である。大衆が自ら進んで集まる魅力ある寺院とはどのようなものであるか真剣に考え直し、老若男女を問わず誰もが気軽に人生のあり方を求めて集れるような寺院体制を作ることが既成仏教者に与えられた義務である。それに答えるにあまりにも荷が勝ち過ぎるが、ともあれ仏教者ひとりひとりがかつと危機感に立ち、今こそ仏教がこの混迷する世の中を濟うべき時であるとの自負のもとに努力することが求められている。以上まとまりのない原稿となつてしまつたが私自身いまの世においてどのようにして仏の教えを世に広めていくか暗中摸索の状態である。このような時に戸頭博士の著書「仏教と社会との対話」を読む機会を得、氏が中で既に寺院仏教に現代社会における存在価値を認めていない厳しい態度をみて、我々がここで奮起しなくては

既成仏教が絶滅の危機に瀕する日がやがて訪れるであろうとの見界に達した。新しい分野である仏教社会学をもっともって深く掘り下げて動いている現代社会の中で仏教をどのように捉えて、どのように位置づけするかが必要ではないかと考える。